

第二奇兵隊書記 小方謙九郎

會員 田村 悌夫

はじめに

小方謙九郎については、まだ纏まった伝記はない。ただ、昭和初期頃に長岡外史が執筆し、小方直人が編纂した活字印刷の私家版小冊子『小方謙九郎小傳』（四二頁）があるのみである。

謙九郎は維新回天の志士として、維新後は実業家として立派な業績を残した維新史の重要人物の一人である。また、長岡外史の実父でもある。

本稿は、温品鎮夫（徳山）・植田吉助・河村満生（上関）各氏ら同学の士の協力を得て、小方謙九郎を養子縁組以前の温品謙吉と以後の小方謙九郎について、それぞれの家系を中心に論ずるものである。

一、温品家の家系

小方謙九郎は天保六年（一八三五）七月二十七日、国防国都濃郡栗屋村（現徳山市栗屋）の庄屋、温品良左衛門の二男として生まれ、幼名を謙吉または弘徳、号を栗山と称した。

謙九郎の生家、温品家は安芸国温科村から来たもので、先祖は温科左衛門尉家親といった。この人は、かつて武田元信に従って上洛したこともある。

その子親信、その孫義清は、みな毛利氏に仕えた。毛利氏の慶長移封の時、防州（山口県）に来たが、義清は多病のため役目をやめ、慶長八年（一六〇三）一月、郎党七人とともに今の栗屋に来て、家を栗の大

樹の下に建て、この地を開拓、農耕に従事した。

このとき、毛利家の一に三星の家紋に因み、温(科)を温(品)に一字変更した。

荒れた山野を開墾し、この地が四神相応の地であるとして慶長九年(一六〇四)二月、村人の守護と五穀豊穰を祈って、峠に祇園午頭天王社(八坂神社)を勧請し、また貸山(岩熊山)に大山祇社を奉祀した。

義清の死後、村人はその徳を慕い四郎丸霊神として奉祀した。

※ 四神とは四方を司る神のことで、東の青龍、西の白虎、南の朱雀、北の玄武の四神をいう。

謙九郎の実兄は温品孫四郎と言ひ、其の祖左衛門尉家親一代の子孫で、文化一四年(一八一七)九月、今の栗屋に生まれた。名は孫謙、聴水と号し、資性温厚篤実で衆望があつた。

天保三年(一八三二)栗屋村の里正(村長)となり、徳山藩の為租税の悪弊を正し、其の功を以て永代苗字を許され、且つ永代庄屋格となる。慶応二年(一八六

六)六月の四境戦争では軍用金調達掛となり、巨額の資金を調達し、禄を受ける。

明治七年(一八七四)、

第七小区長となり、栗屋・

櫛ヶ浜・大島・馬島・給島・

大津島・野島の三村四島を

管轄、その在職四四年間に

公益事業に着眼し、栗屋村

内四ヶ所に灌漑用大堤の築



小方謙九郎

造(安政五年)、堀川運河の掘削(明治六年)、その他道路の改造、橋梁の架設等に尽力した。

明治九年(一八七六)病のため職を退き、明治二六年(一八九三)五月、七六歳で没する。昭和二八年(一九五三)九月、堀川運河掘削の功によつて堀川公園にその頌徳碑が建立された。

次に、安芸国以前の家系について論及する。

文治元年(一一八五)平家没落後、建久三年(一一九二)源頼朝が鎌倉幕府を開き、やがて三代將軍実朝

の死は、後鳥羽上皇の反幕・討幕の計画となり、朝廷と幕府（執権北条氏）との正面衝突である「承久の乱」の勃発となった。

承久三年（一二二二）東海・東山・北陸三道を幕府一九万余騎の軍勢が京都をめざして進攻した。東山道を進む軍勢の総大将は武田信光であった。幕府は大江広元の献策による作戦によって、戦はあつけなく幕府軍の大勝利となつて終わる。乱後の処置はまことにきびしく、後鳥羽上皇に加担した主だった武士の大部分は斬罪され、後鳥羽上皇の手中にあつた膨大な荘園は、すべて幕府に没収され、これらは新しく東国武士の戦功の恩賞として与えられた。東国御家人の西下も、この時に多くみられたのである。

安芸国守護職には先の武田信光、温科村地頭職には武蔵国金子氏が起用された。時は承久三年八月二十七日のことであつた（毛利家文書）。その外に安芸国の地頭職には、小早川氏・吉川氏などもそうであつた。後に中国・北九州を征圧する毛利氏も、その後相模国毛利

荘より吉田荘の地頭職を獲得するようになる。

しかし、彼らは安芸国の守護・地頭職補任によつて、ただちに安芸国に定着したのではなかつた。東国に本拠、即ち本貫地をもつて、安芸国には、それぞれ守護代・地頭をおいてその地を領知するというのが実情であつた。

温科村地頭職に補任された金子氏は、坂東八平氏の武蔵七党の一つ、村山党の出身であつた。武蔵武士の主なるものは武蔵七党と呼ばれ、もともと皆、国庁官人の末裔であつて、荘園発達の過程にあつて勃興し、純然たる武士として成長したものである。

貞観三年（八六一）「凶骨党をなし、群盗山にみつ」との理由で武蔵国だけは、郡ごとに検非違使が設置されるようになり、源頼朝が武蔵国に進出するに至つて、多くは彼に従い活躍したといわれている。

温品家の遠祖は、この金子氏である。金子氏は安芸国温科村地頭に補任されるとともに、地名を名字にし、温科を名乗り、後に毛利氏の臣下となつたのである。

温科左衛門尉家親の左衛門尉とは、左右の衛門尉、兵衛府、のちの檢非違使などの役所を守る役人の名称で、「尉」または「丞」とも書き、第三位の官の呼び名である。

武蔵七党とは、武蔵国内（埼玉県・東京都・川崎市・横浜市）に本拠をおいて、その周辺に分派していった血縁的なつながりをもつ中規模の武士団で、横山・猪股・野與・村山・児玉・丹・西の七党としている。

二、温品謙吉と子息長岡外史

温品家が定住した栗屋村は、西は櫛ヶ浜に接し、東には約一二四メートルの岩熊山があつて、この山の東側を末武川が流れ末武平野（下松市）となつてゐる。温品家から末武川を隔てて、二、三キロ上がつたところに末武北村の大庄屋堀三右衛門の家があつた。（堀家も温品家も、現在も大体同じ場所に存続している）

謙吉は幼少の頃から父良左衛門に厳しく育てられ、一三歳のとき熊毛郡三丘の徳修館に入学し、その後、

徳山藩の家学の書家で、広瀬淡窓門下の歌人牧香松に師事した。

嘉永六年（一八五三）謙吉一人の頃、隣村の大庄屋堀三右衛門の美貌の妹、時と相思相愛の仲となつた。

当時、全国のおよそ半分の農漁村には夜這いの風習があつた。当地にもこの風習はあり、謙吉も夜ごと末武川上流の時のもとへ通つた。二人の逢引きは家柄も同じ庄屋同志であつたので、何ら不思議ではなかつた。

安政元年（一八五四）ペリー来航や江戸に大地震があつたり、世の中が騒然としてゐるとき、一九の娘、堀時は謙吉の子どもを身もごつた。

しかし、二人が相思相愛の仲の夜這いの契りも、そのころは両家の親と世間が認めなければ、正式の婚姻とはみなされなかつた。時に両親がいなかつたことや謙吉が跡取りでなかつたことなどにより、結局二人の仲は無残にも引き裂かれた。

安政三年（一八五六）の春先、時は玖珂郡柳井津町（現柳井市）天神町の埜邑（後に野村）安太郎に所望

され、その後妻として嫁いでいく。野村家は柳井津では、かつて大年寄と呼ばれた豪商（醸造業）の家柄である。

だが、時の胎内にはすでに温品謙吉の子が宿っていた。野村家ではその子の入籍を拒んで、時の腹があまり目立たないうちに実家で分娩させた。

時は実家で出産した男の子に忠蔵と名付けて、熊毛郡小周防村の守田彦衛門の家に嫁いでいる時の姉、梅子に育児を頼んで野村家に帰った。この忠蔵がのちの「長岡外史」である。時は野村家に帰ったものの身体が不調で、そのため離縁となり実家にもどされた。

実家に帰ったのちも、時は病気がちで、二七歳のとき下松の堀家でこの世を去ったのである。

三、小方謙九郎と小方家の家系

萬延元年（一八六〇）温品謙吉は二五歳のとき、熊毛郡室津村の小方家を嗣ぎ、小方謙九郎と称して室津浦に居住することになる。このとき小方家の祖先の小

方長九郎や悌九郎の「九郎」を襲名して謙九郎弘徳と改名した。

小方家は、祖先の一人小方長九郎の名が、風土注進案に享保五年（一七二〇）室津浦年寄として、また元文二年（一七三七）庄屋として出ている旧家である。

現在逗子に居住する小方家の後継者小方美恵子氏によると、小方家は九州の出身で

「天正九年（一五八一）豊後佐伯府ヲ給ヒ大友宗麟ノ幕下トナリ居城ス、緒方三河守惟治ト称シ初代トナル、大友宗麟ノタメ討死ス。惟治ノ子惟徳周防国室津浦ニ難ヲ避ケ居住ス。

天正二十年（文禄元年・一五九二）吉川元春・小早川隆景朝鮮出陣ノ際室津浦ニ繫泊ノ際弊屋ニ數日止宿アリ是ニ依リテ後小早川公ヨリ小字ヲ賜リ小方ト改名ス」（慶長五年・一六〇〇）

と書かれた古文書があるという。

小方家は元々は「緒方」と称し、佐伯の領主であったが、キリシタン大名大友宗麟の内紛に巻き込まれて

討死し、一族が難を避けて船で逃げ出し、着いたのが室津浦であつたのである。(豊後には今も緒方姓が多い)

室津浦は、室津半島の南端皇座山を背にした海駅で、そのすぐ西南にある細長い島が長島である。この室津と長島間の海峡が上関海峡で、昭和四四年に上関大橋で結ばれた。周防灘三海関の上関とは、この長島側の地区をいう。

古代から明治に至るまで、山陽筋の交通は、陸路(山陽道)よりも海路(瀬戸内海)の方が盛んであつた。上関浦は往昔から海の関所で、江戸時代には日本海からの北前船、西国諸大名の参勤交代の御座船や四国、九州からの商船、或は朝鮮通信使などが、風や潮待ちのため港にひしめいた。

萩藩である上関には、毛利藩の御茶屋・番所・越前会所こがしごがあり、幕末には尊王攘夷を論じて維新回天を成し遂げた志士たちの集まる絶好の場所でもあつた。

養父小方市右衛門惟温は熱心な勤王家で、常に東西

諸国に居る尊王攘夷派の志士たちと親しく交流した。

また、吉田松陰・海防僧として知られる僧月性・周布政之助や長州の京都留守居役で梅田雲浜に信服していた宍戸九郎兵衛などとともに王政復古と攘夷などの事を計画し、奔走した勇者でもあつた。

松陰が小方家を訪れたとき、松陰から掛軸や銘の刻まれた小さな木刀が贈られており、その折酒飲しながら、天下を語りあつた詩が残っている。

「方翁五十三 飲酒如長鯨 醫曰酒不利
舍是譚何生 三杯未半酣 氣已吞八紘

室津方翁見訪席上賦贈 二十一回生」

原文解説

「小方市右衛門翁は、五三歳になる。好きな酒を大きな鯨の如く飲む。医者は酒はあまり体にはよくないという。医者の言うことを聞かないでどうして生きることができよう。そこで量を減らしたが、三杯のうち、その半分を飲まないうちに、のびのびした気持ちになり、天下を呑んだようであ

った。」

養子の小方謙九郎は、この養父の意志を継いで文武を好んで天下の大義を唱え、白井小介・赤祿武人・榑崎剛十郎・入江九一などと東奔西走して、幕府政治の失政について憤慨し且つ悲しみ、至る所で攘夷を叫んで活躍した。小方家は志士たちの秘密の場所となった。

謙九郎は、幕末に高杉晋作が結成した奇兵隊に入隊して文久・元治の馬関攘夷戦に参戦、惨敗の後、同志と第二奇兵隊を編んで書記（参謀）となり岩城山に屯し、四境戦争では大島口の戦いに参戦して幕府軍を撃退するなど活躍した。

維新後は明治二年（一八六九）山口脱退の変の鎮撫に尽力したが、その後室津に帰り、山縣有朋の薦めで回漕店や汽船宿などを営んだ。また、地域の発展に貢献するため「潤益社」^{じゆんえきしゃ}を設けて金融に資する等公益事業に力を入れるとともに、室津村の第一回会議員を勤めるなど地元で徳望があった。

明治二六年（一八九三）四月謙九郎は、当時陸軍次

官であった児玉源太郎の仲介により、徳山の児玉邸で、近衛歩兵第四連隊付少佐長岡外史と父子の初対面をした。このとき謙九郎は、家宝の短刀一振りを外史へ与えた。謙九郎五八、外史は三七歳であった。

四、擬洋風建物「四階楼」

明治一二年（一八七九）謙九郎は、同所の棟梁吉崎治兵衛を伴い、長崎に行つて異国の建物などを見聞し、それを参考にして木造四階建擬洋風「四階楼」を建てた。

このたび上関町が、山口県指定有形文化財「四階楼」として一般公開するに際し、保存修復工事が実施されたが、そのとき四階の天井裏で「周防室津 蒸気船問屋 小方出居 四階楼」と墨書された天井下地板を発見した。

上関町の資料によると、明治六年（一八七三）に蒸気船オテント丸が萩と大坂間の定期航海を開始し、室津に寄港している。

〔このオテント丸は、慶応二年（一八六六）三月、高杉晋作と伊藤俊輔が、グラバーの下り船に便乗して長崎に行き、亀山社中の幹旋により、グラバーから薩摩藩の名義で汽船「オテントサマ」（原名）を購入し、四月それに乗り込んで馬関へ帰ったという記録がある。

「オテントサマ」はのちに「丙寅丸」と改名され、明治維新後「オテント丸」となった。

その後、明治一七年（一八八四）大阪商船が定期航路を開設し、謙九郎の汽船問屋は繁盛した。

「出居」とは、四階楼の上三軒隣にあった小方家Ⅱ屋号、汽船問屋「佐波屋」Ⅱの主人の居間兼応接間という意味であるが、別邸と解釈してもよいと思う。

また、「四階楼」という名前は謙九郎が長崎に行ったとき「四海樓」という支那料理店があったようで、それにあやかっただけではないかと思料する。

しかし、当時長崎には四階建の建物はなかったよう

である。四階以上の建物は、近辺では岩国の義濟堂と広島に五階楼という建物があっただけだという。

室津港に面して建てられたこの建物の特異性としては、四階層をつらぬく四本の柱と二階より四階に通ずる八角の通し柱に英国風グリーンの回り階段があり、外部は洋風の軒蛇腹のある漆喰大壁で仕上げていることである。そして内部の壁は、一階には勤王党の証しである十五弁の菊水紋、三階は唐獅子牡丹と椿、四階は天井に鳳凰と四方隅の丸柱に巨大な雲龍が巻きついているなど、その漆喰細工は見事である。

また、三階に茶室があり、四階の四方の窓には、フランス製の赤・黄・緑・青のステンドグラスが短冊状や三角形で入っており、西洋のキリスト教会を思わせるが、建物の床は全て畳敷きの和洋折衷様式である。

屋号「佐波屋」の「さ」の文字が入った鬼瓦を載せたこの建物は、謙九郎が当時の金で三〇〇〇円かけて建てたといわれるが、文明開化当時の香りを漂わせるとともに、港町として栄えた室津の歴史をしのばせる



四階楼全景

今や貴重な文化財である。

おわりに

謙九郎・艶子夫妻には子供がなかったので、遠縁の大島郡東久賀村から藤村なみを養女として入籍、その二年後同村出身で第二奇兵隊の同志、榎崎剛十郎の二男直人を嫡男として迎え入籍した。謙九郎は、この直人をフランスのソルボンヌ大学法学部に留学させた。

一説によると、謙九郎は直人が室津に帰ってくることを期待して、留学先のフランスから送られてきた絵葉書を見て四階楼建築を思いついたのではないかと、と言われている。

残念ながら、フランスから帰った直人は横浜の裁判所に勤務し、上関には帰らなかった。

謙九郎は後継者を定めて後、大正二年（一九一三）九月、七九歳で没した。

小方謙九郎（弘徳）の墓所は、上関海峡を望む室津の日和山にあり、墓所前に顕彰碑が建てられている。

この石碑には、謙九郎と共に奇兵隊で尊王攘夷の志士として活躍した三浦梧楼が碑文を書き、宗教家大内青巒居士（元東洋大学学長）が併書している。

「小方弘徳君碑

陸軍中將從三位子爵 三浦梧楼題額

君謹弘徳通称謙九郎號栗山源姓温品氏又曰横山謙吉天保六年七月某日生干周防国都濃郡栗屋部萬延元年出嗣室津部小方氏君初学業三丘徳修館後徳山牧香松の門學術有淵源行人慷慨重義常與天下名生相交遊時幕府失政唱勤王攘夷春所在相起文久三年六月外艦封馬関君與同志建言藩展宣臨三百目砲老防之来利元治元年正月奇兵隊誤砲擊薩艦奇兵隊総督恐薩艦報復使君伺彼動靜八月外艦渡来砲擊馬関君在前田之宮防戦太刀又来村退守長府慶應二年第二奇兵隊司令使立石孫一郎以議来医合喉部下斬参謀榑崎剛十郎遁赴備中倉敷君與同志者襲賊於岩見島破之六月幕府之兵来占大島郡君為奇兵隊書記兼大斥候有功其後幕兵復来討本藩君從事幕兵又有績

明治二年藩主賞君功加祿二十五石君尋歸郷後來仕大正二年九月十二日病没享年七十九銘日

功戒名遂身財退蔵高風清郎永傳遺芳

大正二年十二月青巒居士大内退撰併書

原文解読（解読者 植田吉助）

「謹んで君弘徳は通称謙九郎または栗山と号す。元の姓は温品又は横山謙吉と言う。天保六年七月某日、周防国都濃郡栗屋村に生まれる。

萬延元年、出て室津部（村）小方氏を継ぐ。初め三丘の徳修館に学び後徳山の牧香松の門に学ぶ。義に重く天下のために世をいきどおって悲しみ、幕府が政治の誤りを唱へ、いたる所で攘夷相起こり、文久三年六月、外国艦隊が下関に現れ、君は同志と自分の意見を藩に述べて臨む。三百目大砲一つでこれを防いで来た。

元治元年正月、奇兵隊が誤って薩摩藩の軍艦を砲撃、奇兵隊総督は薩摩藩の報復を恐れ、君を使者として派遣動靜を伺う。

八月、外国艦が渡来して馬関を砲撃、君は前田の陣営で防戦し、再び来襲の時は村を退いて長府を守る。

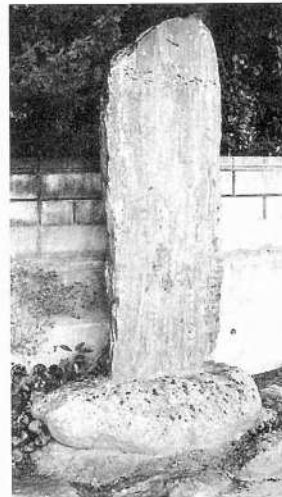
慶應二年、第二奇兵隊司令使立石孫一郎は説得に來合わせた參謀榑崎剛十郎を部下をそそのかして斬殺、脱走して備中に赴く。君は同志の者と脱走兵を岩見島(祝島)に於いてこれを破る。六月、幕府の兵が來て大島郡を占領した為、君は第二奇兵隊書記兼斥候として功有り、其の後幕兵は再び來て、本藩はこれを討つた際に君も從軍して又功績を挙げ、明治二年藩主から賞せられ、君の功に對して加禄二十五石を賜る。ついで帰郷の後大正二年九月十二日没。享年七十九歳銘日

戦の手柄で名とげ、自らその榮譽をかくす姿は、氣高く美しい、永くその名声を後世に残す。

大正二年十二月君の徳行を慕つて主な内容を選んで青巒居士大内退迫加し記す。

以上、本稿は小方謙九郎について考察を加えてきた

が、第二奇兵隊時代の事績は、今後の課題としたい。



小方謙九郎頭彰碑

参考文献

小方謙九郎小傳 長岡外史著

小方直人編纂(私家版)

小方謙九郎略誌 植田吉助(私家版) 平成一四年

人間長岡外史 長岡外史顕彰会 昭和五一年

上関町史 上関町史編纂委員会 昭和六三年

安芸町誌 安芸町誌編集委員会 昭和四八年

ふるさと櫛浜

ふるさと櫛浜編集委員会 昭和六二年

幕末長崎艦船事情 龜山社中ば活かす会 平成四年